

北水研の創設から現在、そして未来へ

メタデータ	言語: Japanese
	出版者: 水産研究・教育機構
	公開日: 2024-07-09
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 大迫, 典久
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://fra.repo.nii.ac.jp/records/2009750

This work is licensed under a Creative Commons Attribution 4.0 International License.



北水研の創設から現在、そして未来へ

所長 大迫 典久



国立研究開発法人水産研究教育機構(以後、機構)は2020年の6月に大きな組織改革を行います。新しい組織では地域対応を主眼としてきた全国の海区水産研究所がなくなり、水産大学校と開発調査センターを除くすべての研究所を、業務内容に主眼を置いて、資源評価に関わる資源研究を主体とする水産資源研究所と増養殖などの水産技術に関わる水産技術研究所の2つの研究所に再編成することになりました。このため今年中に長年使われてきました「北海道区水産研究所」(以後、北水研)の看板を降ろすこととなります。この機関誌「北の海から」はおそらく北水研としての最後の発刊になるかと思うので、最後に創設から今までの北水研の歴史を振り返りたいと思います。

北水研は元々、現在の「地方独立行政法人北海道立総合研究機構」(以後、道総研)の水産本部と同一の試験研究機関から始まっています。その歴史は古く、明治21年に現在の千歳市に国営事業として「千歳人工孵化場」が創設されたのが始まりです。その後は地方事業として明治34年に現在の小樽市高島町に「北海道水産試験場」が創設され、翌年にはこの水産試験場が千歳人工孵化場と合併し本場となり、孵化場は「北海道水産試験場・千歳分場」として事業を継続し、明治40年には西別さけます人工孵化場が水産組合より寄付を受け編入されました。明治43年には北海道拓殖計画により北海道水産試験場は地方費から国費による運営となり、合わせて千歳分場が千歳支所となりました。当時の水産研究所では、イワシ、サンマ、サケ・マス等の回遊魚を対象とした沖合漁業の調査指導、底魚漁場の開発などを行い、北洋サケ・マス沖取り漁業の先鞭をつけるなど北海道漁業の発展に大きく貢献したそうです。

昭和2年には再び北海道拓殖計画により北海道水産試験場から千歳支所が分離独立して「千歳鮭鱒孵化場」として設置され、この時から鮭鱒孵化場と水産試験場は近年再び統合されるまではそれぞれ別機関として存続して行くことになりました。北海道水産試験場は昭和6年に余市町に移転し、道内に支場を設置して本場となる一方、千歳鮭鱒孵化場は「北海道鮭鱒孵化場」と改称し、支場を設けて本場となり、昭和11年には現在の札幌庁舎がある札幌市豊平区に移転しています。

その後大きな転機となったのは終戦後、占領軍による全国水産試験研究機関の改革が勧告されたことでした。この時、北海道水産試験場は国費による「水産庁北海道区水産研究所」と地方費による「北海道道立水産試験場」に分割される一方、「北海道水産孵化場」と改称していた北海道鮭鱒

孵化場も昭和27年の水産資源保護法により「水産庁北海道さけ・ますふ化場」と「北海道立水産孵化場」に分離し、それぞれの試験研究機関に国と北海道の機関が両者併置されることになりました。この時を境に、それぞれが“国の機関”または“北海道の機関”として別々の道を歩き始めることになります。

“国の機関”となった水産庁北海道区水産研究所では、利用部が東海区水産研究所に集約されて廃止になり、また遠洋資源部が遠洋水産研究所の発足に伴い移管されるとともに支所が廃止され、昭和52年には現在の釧路庁舎がある釧路市に移転しました。また水産庁所管の北海道さけ・ますふ化場は、平成9年に「さけ・ます資源管理センター」に改組しました。その後平成13年にこれらの国の機関はそれぞれ別の独立行政法人となりましたが、平成18年に統合され、同一法人(水産総合研究センター)下に「北海道区水産研究所」と「さけますセンター」として両立することになり、さらに平成23年にはこれら2研究所が統合し、現在の「北海道区水産研究所」が誕生いたしました。

以上、これまで北水研の創設から現在に至るまでの経過を述べてきましたが、北水研は機構に属する全水産研究所の中でもこのように特に長い歴史を持っています。また、「北水研」の名称は「鮭鱒孵化場」とともに広く地元北海道の業界や関係団体にも親しまれており、道総研とともに二人三脚で北海道の水産業の発展に大きく貢献して参りました。ご存じのように、北海道はさけ・ます類をはじめとするニシン・ホッケ・スケトウダラや、ホタテ、ウニ、ナマコ、コンブなど、もともと水産物の豊富な地域で、平成29年の漁業生産量は85万トン、生産額は2,785億円であり、日本全国の約2割を占めて全国1位を誇っております。しかしながら、近年は気候変動の影響もあって主要な魚種の顕著な漁獲量の減少が続いており、この現状を変えてゆくためにも私たち研究機関への期待は以前より増えています。

この度の組織改革で北水研は看板を降ろすこととなりますが、研究所がなくなるのではなく、むしろ新たな方向に向けて再出発することになります。実際にさけます分野は水産資源研究所のさけます部門としてより孵化放流事業の高度化を図り、資源・海洋分野は同研究所の水産資源研究センターの1機関として全国的な広い視野に立って調査研究を進めてゆくこととなりますので、引き続きご支援をよろしくお願い致します。残念ながら私は今年度で定年退職となりますが、今後とも新生旧北水研の活躍を陰ながら見守ってゆきたいと思っています。